2019.3.1

現代俳句千葉

132号

巻頭言

創立四十周年に向けて

副会長　並木邑人

千葉県現代俳句協会は、昭和五十五（一九八〇）年五月、会員六十二名の千葉地区協議会として発足しました。爾来三十九年が経過し、来年節目の四十周年を迎えることとなります。

協会では平成元年の十周年俳句大会を皮切りに、五年毎に記念俳句大会を催してきました。それは五年という歩みを振り返りながら、最善の運動体として機能したのかどうか会員の皆様と共に確認検証し、次の五年十年に向って展望・決意を明らかにするためです。

昨年の事業計画に、創立四十周年記念事業の項目を設定しましたが、役員任期が最終年ということもあり、十一月の幹事会において漸く実行委員会の発足をみたところです。

さて、具体的に何を行うかは今後詰めていきますが、基本的には三十周年の際の事業を踏まえながら、新しい要素を検討加味することとなります。とりわけ二〇一一年の東日本大震災により三十周年大会は中止を余儀なくされましたので、四十周年大会は是非とも遂行したいとの強い思いがあります。

一方新しい要素としては、人口減少率を大きく上回る会員・会友数の縮小があります。ピーク時の十五年前には五五〇人を超えていた数が、現在では三五〇人程と六割にまで急減しています。会員数の減少は、事業の実行能力及び財政力に大きな制約を与えることになりますので、回復を計る際にも過大な決断を迫ることとなります。

先の幹事会において提起された事業は、記念講演会、俳句大会、功労者表彰、合同句集とこれらの財政基盤を支える基金設置などですが、新たな事業も考えられるところです。

このためには、実行委員会の機能確立と人員配置、記念大会までのスケジュールと財政計画の編成・遂行が必須となります。そして最も重要なことは、会員の皆様のご賛同ご支持をいただくことです。今後さまざまな情報発信をしてまいりますので、皆様のご助言とご協力をよろしくお願いいたします。

目　次

創立四十周年に向けて　並木邑人 …… 1
諸家近詠 …… 2～4
私の感銘句 …… 5～9
津田沼研究句会報告 …… 10
青葉研究句会報告 …… 10～11
柏研究句会報告 …… 11
新春ミニ吟行会　成田山初詣 …… 12～13
図書紹介　ひろば …… 13
会員・会友の近況 …… 13～14
掲示板 …… 14

千葉県現代俳句協会会報

諸家近詠

ひび割れた仁王の踵花ふぶく
六月の闇まだ浅し湯の匂い
新涼やみたび鏡を覗き込む
寒気団三つに割れたビスケット
紅の色あれこれ出揃い女正月

半田　千枝

着て脱いで梅雨の機嫌に逆らわず
紫蘇もんでくれない色に浮かぶ母
番台が青春だつた夏簾
夕立やあつと云ふ間に逝きし君
錆色になりたる紫陽花散り残る

広瀬　悌子

朝の月ひかりつつランドセルの児
秋桜折れること上手になりて
血管細き昭和のをんな紅椿
柚子風呂や都会にはなき真の闇
点灯し雛の視線うつむかす

福原　郁

鳥渡る裏側のなき地球かな
深秋やどろりと苦い漢方薬
くちびるのぬれる十月桜かな
東京の街は柘榴の実のやうな
どんぐりの落ちてきのふの増えてゆく

浜岡　紀子

駅伝に始まる日本初山河
一望の雪の大山千枚田
老いてなほ祭となれば足袋を履く
木道は歩荷優先水芭蕉
百歳の筆の返信爽やかに

浜名　儀一

鞦韆に別の私が揺れている
日は西に死は垂直に落椿
遠蛙棚田に水のゆき渡り
危うきは静謐にあり半夏生草
被爆地の露草藍を憚らず

野口　久

空木こぼる誰にも逢はず峠越ゆ
両腕に開聞岳の青裾野
深山霧島わずかな窪み火口原
登山道五体預ける遥か来て
北岳の秋灯ひとつ遥かなる

沼山美津江

出漁の空に張りつく寒昴
乗換への終着駅や空つ風
ペコちゃんもサトちゃんもゐて街師走
役立たずゆゑいつまでも焚火番
ストーブの頼もしき音囲みをり

藤井　稜雨

夜長の息何んでもない事は無い
紅葉かつ散るどうでも良い事は無い
何不自由無いと海鼠腸言い返す
どうしようも無い事は無い涸滝
むむむむ無師走の坊主の青筋

細野　一敏

たけのこの皮をむきむきつい本音
胎内に還る道なき墓洗ふ
著莪叢の動かざる石坐禅めく
平成の果ての花野を分け入りて
大寒や肺の深さを知る吐息

元橋　孝之

遠き日の風に逢うまで草矢打つ
この森のどこかで誰か泣く晩夏
ふるさとも吾もほどよく老けて秋
うす紙の向こう昭和の榾明り
冬ざれの奥へ奥へと石を積む

細根　栞

石蕚掻く無心浄土の足の裏
赤潮や報道ヘリの影写し
海の日やハワイを撫でる世界地図
音の無い山里暮らし胡桃割る
炬燵出す亥の日の部屋の陽射しかな

三浦　侃

立つのか死ぬのか詩人よ雪が猛る
因果を短絡させろ地吹雪がホライゾン
氷山が崩れているんだ日和見野郎
寒鴉核融合制禦っちゃあ錬金術だべ
冬の冷や酒　負けると判っているのさ

松﨑あきら

シャツひとつ窓に干されし寒さかな
花柊曇りガラスの歯科医院
ゆりの木のいま静かなる大冬木
空白の埋まらぬ句帳冬木の芽
晩年の只中にあり花八つ手

深山きんぎょ

霜柱腰に金魚のストラップ
不整脈始まる夜の炬燵かな
地球儀に被せ真赤な冬帽子
マラソンの足元ポインセチアかな
初日の出待ちてスマホのビートルズ

前島きんや

諸家近詠

保坂　末子

雪や雪北のじょんから鳴り止まず
冬の野の白いところで肺洗う
重箱のすみへ真っ向う鵙の声
菊日和さんさんとして午後の椅子
住み慣れし水の匂いで白鳥来

柳沢　純

山里の天気気まぐれ暮れ早し
うぬぼれず自慢もせずに障子貼る
行く年をハイタッチして送りけり
疲れ目に飛び込むみどり冬菜買う
まだ明日があると思って日向ぼこ

森村　文子

三時には赤い蟹来る夏休み
絵の中になにがなんだか風の家
万華鏡秋のきれいな子ども欲し
星月夜漢字計算もうすこし
こころから大切な人冬桜

馬渕　津枝

早春の靴三拍子の鼓動
残生深読みするでなし心太
あの時を木の実でてきて想い出す
時雨るるやすこし弱気になっている
引くたびに遠ざかりゆく毛糸玉

森　孝子

燕去る今日ことさらの空の蒼
ハイテクの世に追いつけず落葉掃く
晩節のほころびを縫う夜長かな
幼な日の小径におりぬ木の実手に
マスクして小さな神とすれ違う

山口　梅子

柴折戸を編む夫のゐて桜餅
新緑やポニーにまたがる一年生
小春日の回廊眩き国分尼寺
小春日やカモメは少年の船を追ふ
初夢や星に潮吹く大鯨

山口　彩子

竜の玉いちばんきれいな陽の光
桜鯛コリリと噛んで濃きいのち
梅雨の月ときに足音待っている
惻々と人は色なき風の中
日の暮は風の底見え石蕗の花

柳本　ゆみ

失敗談ふくらんで案山子の臓器
生きづらい人の世目白に紛れる
冬の虫革命の曲の駅ピアノ
おさなごの接吻狐火を呼ぶ
返信は御自愛と書き風邪を引く

三宅たくみ

春の山真昼の月の軽きこと
黒揚羽ゴリラの檻の中と外
やわらかく生きやわらかく桃熟るる
サッカー見て来て松茸飯食べて
おおかみに誘われ冬野行く少年

水野　禮子

検温の折れ線グラフ日脚伸ぶ
恋という微熱のかけら桜貝
遠雷は人を呼ぶ笛父の笛
子が走る遠心力の秋高し
極月の風の足あと山頭火

増田　豊子

普段とは違ふ空間彼岸寺
京成線もダイヤ混乱台風過
水澄んでわかつて来たるサンサーンス
安田講堂のフォーラム銀杏黄葉かな
皮ごと食べられますとメモと葡萄

村田　珠子

月涼し少年闇に寄りかかる
みどり児の握力憲法記念の日
純情がほぐれて烏瓜の花
ポケットに埒とネクタイ月太る
凩が磨くオリオン通夜更ける

望月　彩

終日や男波女波と春長ける
吹かれ来て余寒漂う昼の月
どんど焼き脳裏の奥で燃え盛る
一世にも息継ぎほしや山眠る
手庇の富士は借景冴返る

政成　一行

線量計振れてコスモス揺れている
震度4　脳から剥がれる文字の列
障がい犬の跛行斜行へ笹子鳴く
罪状は情あわきこと　散山茶花
初祈祷ねむる神輿と洟水と

藤岡　尚子

山ひとつ据ゑ麦秋の無人駅
波音を日傘に聞かせ遠き人
拗ねる子は放つておくぞと青葉木菟
お泊りのパンツは二枚夏休み
虚栗つじつま合はぬ恋をして

諸家近詠

八月の海に刀身焼残る
越境の南瓜大きく和みをり
秋のセル金釘流の生残り
秋の蜥蜴「キ」の字「キ」の字に消えにけり
雀蛤となる稀に汐吹く魚を飼う

矢野　忠男

身に刺せる僧の言葉や寒の葬
寒厳し遥かな沖に不審船
初漁や猿も鯨も沖言葉
ふるさとは有難きもの梅便り
眼洗いは一つの決意年新た

実籾　繁

自堕落かもね蓮の骨を見ている
コーヒーのミルク目覚めるまでが寒
一葉落つ朴思い詰めたる感じ
冬の落日秩父嶺が熟れている
三十年を平らに成して春を待つ

田村　隆雄

生き様はつぎはぎだらけ秋の風
人間は歯磨き覚え秋澄みぬ
口あけてそつけなき振り通草の実
病院に靴屋来てゐる冬の暮
焼藷を一本残す雨の夜

山﨑　幸子

落ち葉先駆けスクランブル交差点
悴んだ指をいっぽんずつ剥がす
電線の空を撓めて葱畑
大寒の日や花嫁の綿帽子
梅咲くや父いて父の父がいて

森　章

パソコンを叩いて撫でて十二月
人生の山は透明枯葉舞う
朝化粧小指に止まる秋の風
オリーブの実走れない足走り出す
鯉の群土筆の一部顔出せず

三須　民恵

窓は星のイルミネーションおでん酒
見てみたい夢があります除夜の鐘
藍色の海はカンバス初日の出
初夢の夢の中にも夢があり
床の間の朝日かがやく福寿草

山田　邦彦

春泥を蹴とばしてゆく十二歳
花満開どこで息つぎ入れようか
夏富士の正面心療内科です
炎昼のどこを押しても出口がない
雑踏を振りきるようにコート脱ぐ

星野　一惠

全世代型内憂カメムシ五千
掃除機に冬蠅生きている気配
近所は異界ねずみのこまくら口噤む
平成という言葉うつくし大旦
メレンゲの角もったりと春よ来い

松本　千花

卵中にたゝかう渦や寒卵
厄除の寺に着くまで転ばない
かげろうに抜きさしならぬ煙かな
捨てられる者に紛れて浮いて来い
モダンジャズなじめば熱い男見え

藤田　守啓

きつぱりと夏雲をよぶカツサンド
甲乙をつけたがる世や菊花展
むささびのとんでファックス白紙なる
もしかしてわれらが未来室の花
平手打ちしたのはだあれ紙風船

藤井　遥

奥行きの無い夢ばかり見る師走
寒星を嵌め込んでいる窓ひとつ
猫じゃらし本気の風が大好きです
鴨群れて池は大きく談笑
凧揚げて引いて引かれて私も空

森須　蘭

雪の夜の起き臥し骨を悲します
成行きで水を捨てたる鴨の恋
団栗踏む何のけじめか二度三度
喋りだすパセリ真冬の海が見え
不覚にも椿の一語聞き洩らす

山﨑　政江

春風やふっと眉間が軽くなる
被災地の汗美しきボランティア
継目なき月日よ空よさるすべり
父という静かな背中白菖蒲
塩壺に塩足している極暑かな

山口　夕紀

秋麗やコントラバスを抱いては
白鳥の野太き声よ曇天よ
寒の雨ポールモーリア透きとおる
帯揚げのうす紅六つの花しまく
ブーケトス五月の空をかがやかす

増田　元子

私の感銘句

	作者名	号	頁
金澤　惠子			
秋霖や白黒決めぬ人と居る	田村　麗	134	
原爆忌墓標のごとく雲の峰	高橋　節夫	134	
霜解けの層に日の斑やチバニアン	津髙里永子	134	
陽炎に組みゆく鉄骨大都会	徳吉洋二郎	134	
玉眼の奥にわたしと春の闇	東　公子	135	
旅人に昼の灯ともす熟柿かな	林　ゆみ	135	
八月や記憶のなかの迷子たち	林　阿愚林	135	
我という旅人と行く夏の雲	鳴戸　奈菜	135	
行けそうでゆけぬ秋思の旅鞄	袴田　菊子	135	
ゆく秋や地下に蠢く活断層	林　紀之介	135	
國分　三德			
水の私語盗聴しました熱帯魚	山中　頼子	128	
秋灯に順番のある家並かな	をがはまなぶ	128	
妊りて日傘小さくなりにけり	橋口　久子	128	
水無月の膝から下はわからず屋	横須賀洋子	128	
駅弁のふたを開ければ大花野	岡田　淑子	128	
炎天や歩くカラスとすれ違ふ	岡﨑　翠	128	
幸せの完全雇用蟻の列	小野　裕文	129	
親子でも他人でもない春の雲	小林　雪枝	130	
夫見舞ふだけの元日暮れにけり	中山　皓雪	131	
手作りの黄泉売新聞夕焼欄	普川　洋	131	

幸せの完全雇用蟻の列　小野　裕文

蟻の集団・社会をどう捉えてどう表現するかに多くの俳人たちが苦労してきた。いろんな試みがなされたが、小野裕文さんはいとも簡単に完全雇用と捉えた。びっくり仰天だ。たしかに蟻は一匹たりとも失業中でぶらぶらしている奴はいないようだ。蟻はみんな忙しそうだし、不平不満そうな奴はいない。人間をやめて蟻になりたいなんていうのが現れるかもしれない。この句は目のつけどころが良かった。脱帽です。

小野　功			
汗の衣脱いで羽化するおとこかな	山中　頼子	128	
宿題に童子の愚痴やすいっちょん	秋山　勝男	128	
山眠るいつかひとりになる時間	北野　耕兵	128	
春昼の木々に声なし兜太亡し	塩野谷　仁	129	
深爪の男あつまる桃の花	清水　伶	129	
紫陽花やまだある咎をしまいこむ	直江　裕子	130	
愛なくて何の秋刀魚ぞほろ苦し	富澤ムツ子	130	
吾と我戦っている残暑かな	徳吉洋二郎	131	
カギカッコから秋の陽が洩れて	普川　洋	131	
我という旅人と行く夏の雲	鳴戸　奈菜	131	
青木　一夫			
捨つる物多い東京鰯雲	石井　稔	128	
終活の色合いなれば足袋の白	加納ひでこ	128	
遥かなる族おもえば蛍かな	大見　充子	128	
北斎や両国橋に葱下げて	岡田　淑子	128	
待春や同時に入る上下線	里見　さち	129	
麦秋の肩の重さを午後という	黒澤　雅代	129	
あとはいかに美しく舞う花は葉に	末廣　陽惠	129	
冷奴余生笑って暮らしたい	鈴木　和子	129	10
加齢ふと眠ってばかりいる金魚	田口満代子	130	2
小鳥来る誇らしく凡人であり	荒木　洋子	131	4

冷奴余生笑って暮らしたい　鈴木　和子

作者は癌という病気と十年という長い間闘ってきた。「病気にはなったけれど病人にはならない」と常々家族や仲間に明るくふるまっていた。句会には出られなかったが欠かさず出句して楽しんでいた。そういう作者にとっては平凡な幸せが究極の願望だったが、それも叶わなかった。それだけにこの句の言葉の重みをひしひしと感じて感動した句です。

馬渕　津枝			
駅弁のふたを開ければ大花野	岡田　淑子	128	4
さくら草仲良きこともくたびれる	加藤　法子	128	4
梅雨兆す傘屋帽子屋隣組	河合　利枝	129	8
かたつむり何もない日もいそがしい	小野　裕文	129	8
蛇穴に入る物騒な世は御免	金澤　惠子	129	8
廃線の先は故郷柿の秋	泉　志眞子	130	2
組紐のかたりことりと伸びて春	高橋富久江	130	2
加齢ふと眠ってばかりいる金魚	田口満代子	130	2
困り果てた奴から糸瓜になりにけり	並木　邑人	131	4
新豆腐水に無音の光りあり	野口　京子	131	5
大見　充子			
まだ鶏になれず夕日の鶏頭花	岡田　淑子	128	4
絶景の秋思はんぶんポルトガル	菊地　京子	128	4
もう何も言うことの無き冬木立	加藤　法子	128	4
朧なる網に打たるる一角獣	長井　寛	129	8
春の野の人に曇天熟れてゆく	塩野谷　仁	129	8
真夜中の椿ひとつは月に落つ	塩野谷　仁	129	8
本能と遊び疲れてきりぎりす	長濵　聰子	130	3
定住漂泊おぼろ狐の尾の千切れ	高木　一惠	130	4
人間を脱ぎ万緑のど真ん中	徳吉洋二郎	131	4
跫音は我が倒影か雪暮れて	並木　邑人	131	4

真夜中の椿ひとつは月に落つ　塩野谷　仁

誰も見ていないであろう真夜中、そうだ椿のひとつは月に落ちているかも知れない。いや、きっと落ちているに違いない。限りなく広がるロマン。こういう句が大好きです。

三好美穂子

まだ続く晩年秋は気まぐれ　横須賀洋子　128 3
風葬の手続き蝶の列にいる　菊地　京子　128 4
鎮魂の海を剥がして秋怒涛　小野富美子　128 4
朧の夜優しい人から消えてゆく　小張　直子　129 9
一月が膨らんでくる紙袋　窪田　俊作　129 10
遥かなる雪解水から紀行文　小池美佐子　130 2
水中花女の余熱尽きるまで　長濱　聰子　130 3
さよならの無くて薔薇より濃き別れ　高木　一惠　130 4
木の実独楽打ち合っており心電図　倉岡　けい　131 5
黄砂降る太古の夕日の匂い連れ　羽村美和子　131 5
さよならの無くて薔薇より濃き別れ　高木　一惠

人には別れが必ずついてくる。遠くに離れた肉親や友人、再会のあとにはこれが最後かなと思い別れる。いざと云う時には間に合わぬと覚悟を決めて、そういう歳になってしまった。それでも濃き別れと言い切った句に納得しました。

細野　一敏

蝌蚪に足ラストダンスの靴がない　加倉井允子　128 3
かと言って無下には出来ず青大将　加藤　法子　128 4
遅桜嫌いな奴に会いに行く　金澤　惠子　129 8
死なばわれ善き人なりき鰤大根　鈴木まんぼう　129 9
背を押され別の自分になる寒さ　小林　実　129 9
蒼鷹や杭一本の非武装地　千葉　智司　130 2
父と子の黙の深さや蟬時雨　長濱　聰子　130 3
憂国の地軸を探すなめくじり　大薗　智子　130 10
炎天を抜け東京を抜けられず　徳吉洋二郎　131 4
揚げ雲雀少し左が青鞜派　羽村美和子　131 5
背を押され別の自分になる寒さ　小林　実

「寒さ」を詠み込む作者の巧さが際立っている。「寒さ」は皮膚感覚にも客観的な情景にも使われるが、別の自分になる寒さと心象を表わす小生もこの句の感覚を子供の頃から持ち合わせており、今だに後悔しきりである。おっちょこちょいで、思慮が足らず、つい器量も無いのに煽てに乗ってしまう。そんな思いがとてもあったなと想像が深まりました。季語の「寒さ」の使い方に脱帽である。

久保　筑峯

巨星墜つこの淋しさを金縷梅咲く　塩野谷　仁　129 8
甘いので昭和へ半分置く西瓜　木下　昌子　129 8
鵯や鶲や朝のなごりの椅子たたむ　田口満代子　130 2
愛なくて何の秋刀魚ぞほろ苦し　富澤ムツ子　130 4
さよならの無くて薔薇より濃き別れ　高木　一惠　130 4
晩節や南京豆をむき続け　徳吉洋二郎　131 4
きさらぎの石牟礼道子干潟ゆく　檜垣　梧樓　131 4
焦げくさきも懐かし昭和柿熟るる　畠　淑子　131 4
灰汁抜けぬ昭和の記憶鳳仙花　林　阿愚林　131 5
新豆腐水に無音の光りあり　野口　京子　131 5
巨星墜つこの淋しさを金縷梅咲く　塩野谷　仁

なぜ戦争はなくならないのか。一言で答えさせて下さい。「物欲」の逞しさです。あらゆる欲のうちで最低最強の「欲」ですが、それだけにもっとも制御不可能、且つ付和雷同を生みやすい欲と見ています。そこに人間の暮らしが、武力依存を募らせる因もある。―兜太の言葉―平成三十年二月二十日、九十八歳で急逝した俳句界の巨星、戦後俳句界の重要な現場に常に立ち会ってきた金子兜太氏。「谷間谷間に満作が咲く荒凡夫」の句碑。長瀞町宝登山神社に建つ。

徳吉洋二郎

炎昼や真っ赤なメトロ水の上　池田　博臣　128 2
木の芽風まだ骨風と呼ぶべきか　横須賀洋子　128 3
もう何も言うことの無き冬木立　加藤　法子　128 4
真夜中の椿ひとつは月に落つ　塩野谷　仁　129 8
蛇穴に入る物騒な世は御免　金澤　惠子　129 8
水中花女の余熱尽きるまで　長濱　聰子　130 3
月欠けて誰が仕掛けた狐罠　中村　冬美　130 4
蒙古斑あさって春が来るという　なかもと淑子　130 4
十二月八日節穴から朝日　中村　直子　130 4
青空を真二つに裁ち鵙高音　東　公子　131 5
蛇穴に入る物騒な世は御免　金澤　惠子

なんと句意の単純明確な句だろう。俳句はこれで良いのだ。なにも難しい言葉を使う必要は無い。蛇が穴に入るのはこの物騒な世から逃げるためだという。蛇とは我々人間であり、「物騒」のひと言で、全てのことが言い得ている。今、世界中で起きている貧困、テロ、自然破壊から逃れるには穴に入るしか無いと作者は言う。と言いたいところだが、作者は敢えて反対のことを言っているのだ。これらの困難に真正面からぶつかって行こうと言う決意である。

畠　淑子

炎昼の表情筋から壊れだす　森須　蘭　127 4
戦知らずの水鉄砲で撃たれけり　新井　秋芳　127 5
梅雨長し星の缶詰開けようか　吉野　精　127 5
立秋やカフカいよいよ手に重し　伊藤　希眸　127 5
十三夜潮ひたひたと航を曳く　上野　紫泉　127 6
水無月の膝から下はわからず屋　横須賀洋子　128 3
身の内の火種は絶えず冬椿　小野　功　128 3
さくら草仲良きこともくたびれる　加藤　法子　128 4
働いて恋して泣いて十三夜　下村　洋子　129 9
手を合わすただそれだけの春の凪　鈴木　和子　129 10

菅ノ谷文子

愚痴一つまあるく抱いて夜の桃　山中とみ子　128 2
蝌蚪に足ラストダンスの靴がない　加倉井允子　128 3
わくわくを食べた鳥より囀れる　木下　昌子　129 8
八月や無口な父がしゃべりだす　重田　忠雄　129 9
朧の夜優しい人から消えてゆく　小張　直子　129 9
春の海戻って来ないブーメラン　窪田　俊作　129 10
衣被他人に語れぬ恋をして　佐久間眞城　130 2
天と地の倒錯枝垂れ桜かな　髙橋　宗史　130 2
水中花女の余熱尽きるまで　長濵　聰子　130 3
新豆腐水に無音の光りあり　野口　京子　131 5

春の海戻って来ないブーメラン　窪田　俊作

すぐに、東日本大震災の大勢の命を奪った大津波を連想した。春の穏やかな海が突然、恐ろしい海に姿を変えたのだ。避難できなかった小学生等や、避難の呼びかけを続け、市民を避難させて、自らの命を落としてしまった公務員の事を思い浮かべた。やるせない気持ちでいっぱいになった。

関谷ひろ子

蓮にまだ枯れる勢い摩天楼　山﨑　政江　128 2
鰯雲歩けるうちは靴を買う　井上きよ美　128 2
朴の花いつかそのまま雲になる　北野　耕兵　128 3
北斎や両国橋に葱下げて　岡田　淑子　128 4
逝く春の鳴咽か雨の降りやまず　小張　直子　129 9
あとはいかに美しく舞う花は葉に　末廣　陽惠　129 10
無人駅柿万灯のお出迎え　大地　節子　130 3
掛け声はいつも自分に葛の花　馬場　益江　131 5
落葉して渓流の眠い体操　倉岡　けい　131 5
虫干しの一ト日を遠き日に遊ぶ　林　紀之介　131 5

椎名　鳳人

まだ鶏になれず夕日の鶏頭花　岡田　淑子　128 4
さくら草仲良きこともくたびれる　加藤　法子　128 4
俳諧を七曲りして花は葉に　長井　寛　129 8
蒼鷹や杭一本の非武装地　千葉　智司　130 2
風あれば人心一新花菖蒲　戸邉　光一　130 2
炎天を抜け東京を抜けられず　徳吉洋二郎　131 4
跫音は我が倒影か雪暮れて　並木　邑人　131 4
小鳥来る誇らしく凡人であり　荒木　洋子　131 4
春寒や握り返さぬ手を握る　中山　皓雪　131 4
前山は右肩おとし眠りつぐ　倉岡　けい　131 5

風あれば人心一新花菖蒲　戸邉　光一

言うまでもなく花菖蒲は、シベリア原産の原種を鑑賞用に改良した日本の園芸品として世界的に有名な植物であり、その価値は高い。柔らかな新しい風に揺れる白や紫の花の姿には身も心も洗われる。日本人にとっては、ときあたかも衣更えの季節でもある。まさしく人心一新なのである。作者の感動が伝わって来る一句。

藤岡　尚子

逝く秋の舟描かれて江戸切子　石﨑多寿子　128 3
ひざ小僧力のこもる歌留多とり　遠藤　寛子　128 3
初夏のふくらむ水を掬いけり　菊池　和子　128 3
冬麗の少し酸っぱい赤ん坊　楠見　惠子　128 4
安曇野は案山子三昧晴れ渡る　國分　三德　129 9
だいじょうぶは魔法の言葉あたたかし　黒川　秀夫　129 10
声かけてもらつて伸びる糸瓜かな　中里　結　130 3
春日の廃屋ユンボに叩かれて　なかもと淑子　130 4
指笛の風が沖より大根干す　倉岡　けい　131 5
生きてこそ愛でる愛でらるヒト・サクラ　鳴戸　奈菜　131 5

指笛の風が沖より大根干す　倉岡　けい

「指笛の風」の表現が素敵だ。海風に乗って指笛が聞こえる。風にちぎれての時折の音であるからメロディは定かでないが、かつて父や兄がよく鳴らしていた指笛を思い出し、懐かしさいっぱいの作者。大根を干す手をしばし止めて次の音を待っている様子が窺える。作者と共に海の向こうの故郷を恋い、優しい気持ちにさせられた句だった。

日野　葉子

山眠るいつかひとりになる時間　北野　耕兵　128 3
冷房車背正しても譲られる　興津　恭子　128 3
北斎や両国橋に葱下げて　岡田　淑子　128 4
春めきて主婦の仕事の走り出す　齋藤　溥子　129 8
春うらら草加松原曽良の道　澤田　寿一　129 10
でで虫の動くを待てる幼き子　近藤　幸子　129 10
渡り漁夫三国は格子多き町　中嶋　三雄　130 3
たこ胡瓜出合いの妙や江戸切り子　なかもと淑子　130 4

春寒や握り返さぬ手を握る　中山　皓雪　131 4
青嵐鳥の声の裏返り　福田志津子　131 4

山眠るいつかひとりになる時間　北野　耕兵

自然界も四季折々に進化・退化して「山眠る」という季語に達し、又再生を繰り返している。人も又様々な体験をし、大勢の人に出会い別れを繰り返している。そしてひとりになる。平明な表現で人生を言いつくしている句に感銘を受けました。

イザベル真央

鰯雲歩けるうちは靴を買う　井上きよ美　128 2
真実を語ることなしところてん　安斎謙太郎　128 2
お互いを屋号で呼んで盆見舞　石井　稔　128 2
まだ続く晩年秋は気まぐれ　横須賀洋子　128 3
何となく五体満足初湯かな　岡田　春人　128 3
りんご噛む宇宙はまるいものばかり　岡田　淑子　128 4
四万六千日日々悪相となりゆけり　小林　実　129 9
終わったとどこかで思う夕端居　直江　裕子　130 3
水中花ひらく伴侶の水のなか　田沼美智子　130 4
炎天を抜け東京を抜けられず　徳吉洋二郎　131 4
真実を語ることなしところてん　安斎謙太郎

炎環の流山ざくろ句会を一緒に立ちあげた謙太郎先生とは、十五年程流山ざくろ句会で苦楽を共にした。句集『尺取虫』を出した農学博士だった。お酒が入ると饒舌になったが、句会では静かな進行だった。「この句のどこがいいの」とか批評された。ある日、炎環の本部句会で問題句を出されて、石寒太先生と激論になった。涸滝の句だったと思う。その後、高齢を理由に退会された。「ほっといて下さることも親切と言うものです」と、奥様に言われた。

千葉　信子

雛の夜は雛の顔して出てゆかん　山﨑　政江　128 2
初仕事まず一本のチョーク折る　片岡　秀樹　128 3
姿よき秋刀魚のやうに寝てみたる　川又　優　128 4
面売りの面立てて売る花ぐもり　加藤　法子　128 4
月天心眼底検査白光す　岡﨑　翠　128 4
真夜中の椿ひとつは月に落つ　塩野谷　仁　129 8
目ぐすりの一滴寒の月ゆらぐ　里見　さち　129 8
食はるるとは想定外の海鼠かな　鈴木まんぼう　129 9
過去はひらがな里山は深みどり　永井　奈々　130 3
我という旅人と行く夏の雲　鳴戸　奈菜　131 5

吉野　精

冬瓜をすっぽり抱いて考える　横須賀洋子　128 3
何となく五体満足初湯かな　岡田　春人　128 3
まだ鶏になれず夕日の鶏頭花　岡田　淑子　128 4
硝煙も沈丁の香もしのび寄る　神作　仁子　129 8
色あせしセーターの恋捨てられぬ　小多田文子　129 10
銀行出て桜並木を素通りす　小林　雪枝　130 2
水中花女の余熱尽きるまで　長濵　聰子　130 3
嬰の手が閉じてひらいて春摑む　田村　麗　131 4
人間を脱ぎ万緑のど真ん中　徳吉洋二郎　131 4
黄砂降る太古の夕日の匂い連れ　羽村美和子　131 5
銀行出て桜並木を素通りす　小林　雪枝

銀行を出て美しい桜並木を見ず自宅に帰る。人生の一こま。考えさせられる一句です。

多胡たかし

母の日や黙って花の置かれおり　橋口　久子　128 2
囀りや岸にふくらむ水明り　川又　優　128 4
冬めくとおもう遠くの工事音　楠見　惠子　128 4
春昼の木々に声なし兜太亡し　塩野谷　仁　129 8
灯さずに春の愁いの中にいる　佐々木幸子　129 9
ひとり降りる夕蜩の無人駅　泉　志眞子　130 2
夫見舞ふだけの元日暮れにけり　中山　皓雪　131 4
人間を脱ぎ万緑のど真ん中　徳吉洋二郎　131 4
梵鐘のいくたび越ゆる雪の嵩　荒木　洋子　131 4
我という旅人と行く夏の雲　鳴戸　奈菜　131 5

小張　直子

花野来て呼ばれたように齢をとる　山﨑　政江　128 2
鰯雲歩けるうちは靴を買う　井上きよ美　128 2
白椿明日を思えば落ちきれず　加倉井允子　128 3
花散るやどうでもいい過去すてちまお　大澤　重市　128 4
風葬の手続き蝶の列にいる　菊地　京子　128 4
須佐之男命に斬らる蜥蜴の尾　長井　寛　129 8
狐火は女衒の墓のある辺り　千葉　智司　130 2
春の雪より星行きの渡し舟　荒木　洋子　131 4
秋思やや使わぬ小指屈伸す　野口　京子　131 5
生きてこそ愛でる愛でらるヒト・サクラ　鳴戸　奈菜　131 5
鰯雲歩けるうちは靴を買う　井上きよ美

一読して読み手の私達にも納得出来る作品である。人間は高齢になると足腰から弱って来て、歩行困難になる恐怖心が多少ともあるので、靴を購入するのは歩行出来るから購入するのである。作者は〝歩けるうちは靴を買う〟と作品化

している。最もな事であり、歩行困難になったら靴は必要ないと言う事でしょう。読み手の私達を自然に納得させてしまう、不思議な上手な佳い句である。

保坂　末子

雛の夜は雛の顔して出てゆかん　山﨑　政江　128 2
満天の星に落ち着く刈田かな　山中とみ子　128 2
鰯雲歩けるうちは靴を買う　井上きよ美　128 2
駅弁のふたを開ければ大花野　岡田　淑子　128 4
真夜中の椿ひとつは月に落つ　塩野谷　仁　129 8
春愁や見えざるものに吾が背中　椎名　鳳人　129 10
伏線を震わせてゐる冬の蝶　千葉　智司　130 2
補陀落へいったりきたり昼寝覚　長井　寛　130 3
冴えかえる独りの魂の置きどころ　中村　棹舟　130 4
陽炎に組みゆく鉄骨大都会　徳吉洋二郎　131 4

森井美恵子

花前線長寿の村を通りおり　菅ノ谷文子　129 9
韋駄天の光るくるぶし夏近し　佐藤　直子　129 14
みどりごの真水のやうな汗ぬぐふ　千葉　信子　130 2
濃紫陽花開け放されし寺の門　戸邉　光一　130 2
バケツの水風が凹ませ燕来る　永井アイ子　130 3
如月の骨のきれいな魚を割く　中村　冬美　130 4
錠剤の黄色ころがり女正月　中村　直子　130 4
御慶にも濃淡のあり茜雲　中山　皓雪　131 4
「ふ」のなかをペンギン急ぐぼたん雪　樋口　博徳　131 5
エスカレーターに人は前向き冬の朝　林　みさき　131 13
エスカレーターに人は前向き冬の朝　**林　みさき**

日常のさりげない風景をあっさりとした詠みで、景をすぐに立ち上がらせる。それでいて何か物事の本質を感じさせる。確かに昇りエスカレーターは背からみると前向き、降りエスカレーターも背をみせて前向き。作者は背中からの前向きに視点をおく。

冬の朝、いつものように背すじを伸ばし、前を向いて昇降機へ向かう。

林　ゆみ

破芭蕉ばさりと昼を裏返す　長井　寛　129 8
巨星墜つこの淋しさを金縷梅咲く　塩野谷　仁　129 8
てのひらに天網はあり冬すみれ　清水　伶　129 8
来し方を丸ごと齧る冬りんご　久保　筑峯　129 9
大試験富士の体積解き難し　鈴木　房州　129 9
寒月光平和はいつもガラス質　黒澤　雅代　129 9
まんぼうを呑みこんじゃった春の月　久野　康子　129 9
加齢ふと眠ってばかりいる金魚　田口満代子　130 2
月欠けて誰が仕掛けた狐罠　中村　冬美　130 4
銀杏降る生前葬のにぎやかに　普川　洋　131 5
月欠けて誰が仕掛けた狐罠　**中村　冬美**

月と狐の取り合わせは容易に想定できるが、狐罠を仕掛けたのは月が欠けたからと言われると、忽ちミステリアスになり、詩的世界に引き込まれてしまう。〈月欠けて〉の発語が巧みである。作者は女性で、この狐罠は何だろうかと想像するのも楽しい。筆者にはこの狐罠は深刻な事ではなく、日常の一コマを「狐罠」等と少し大げさに表現されたのかも知れない。ウイットに富み印象的で好きな句でした。

重田　忠雄

水の私語盗聴しました熱帯魚　山中　頼子　128 2
黄落の街窓際の一人席　川嶋　悦子　128 3
風葬の手続き蝶の列にいる　菊地　京子　128 4
朧なる網に打たるる一角獣　長井　寛　129 8
春昼の木々に声なし兜太亡し　塩野谷　仁　129 8
深爪の男あつまる桃の花　清水　伶　129 8
寒月光平和はいつもガラス質　黒澤　雅代　129 9
補陀落へいったりきたり昼寝覚　長井　寛　130 3
破蓮捨てた時間に過去が無い　田村　麗　131 4
炎天を抜け東京を抜けられず　徳吉洋二郎　131 4

■総会・俳句大会のお知らせ■

既にお知らせの通り

三月十七日（日）に定期総会・俳句大会が千葉市文化センターにおいて開催されます。

定期総会　十時半開会

俳句大会　十三時開催（席題発表は十時）

是非ご参加下さい。

◆春の吟行会◆

日　時　平成三十一年四月三十日（火）

場　所　市川市　手児奈霊神堂

句会場　船橋市勤労市民センター

＊問合せ先ほか、詳細は折り込みのチラシをご覧下さい。

❑❑ 津田沼研究句会報告 ❑❑

（於：津田沼一丁目町会会館）

●第三一八回　平成三十年十一月十三日

司会　檜垣　梧樓

ボジョレだなんて復刻版赤玉ワイン　金子　未完
月夜茸オモチャの国を出られない　イザベル真央
シンプルに象の尿する秋の暮れ　横須賀洋子
立冬の心細さをポケットに　白木　暢子
妹よウオータムインニューヨーク　岡田　淑子
雁の列消せどもきえぬ原子の火　池田　博臣
「コウノトリ」の目指す地球よ神無月　深山きんぎょ
虫唄う星の雫をのど飴に　吉野　精
冬に入る亡き人々を数へつつ　股野　久子
陽だまりの郵便受けにカリンの香　なかもと淑子
冬天へブラスバンドの大太鼓　前島きんや
こんがりと羽根付餃子文化の日　村上　澄子
ラケット置く泣き虫愛ちゃん新松子　徳吉洋二郎
土佐犬を脇に坐らせ松手入れ　佐藤　晏行
無戸籍男の五十年目の小春かな　檜垣　梧樓

●第三一九回　平成三十年十二月十一日

司会　徳吉洋二郎

過労死ライン金柑の実がたわわ　白木　暢子
十二月八日瘡蓋が剝がれない　徳吉洋二郎
シャツひとつ窓に干されし寒さかな　深山きんぎょ
本能は猫に近くて草もみじ　横須賀洋子
脱サラの蕎麦屋に更ける討ち入り日　佐藤　晏行
笑ってもいられぬ齢や冬銀河　岡田　淑子
時雨来るとてもやさしい債権者　吉野　精
腹背の間の尺寸かげ冴ゆる　高木　一惠
棕櫚を剝ぐ正気の母に紙おむつ　イザベル真央
極月の手帳マグマの匂いかな　池田　博臣
十二月八日凩は未だ来ない　村上　澄子
犬小屋の錆びし鎖や花八つ手　前島きんや
鴨の陣快気祝いを不忍で　金子　未完
北窓塞ぐ新仏はまだ寒い　檜垣　梧樓
ハイタッチ着ぶくれの児が降りてゆく　股野　久子
風評の林檎かじる子健やかや　なかもと淑子

●第三二〇回　平成三十一年一月八日

司会　イザベル真央

来し方の点と線あり冬銀河　深山きんぎょ
お汁粉も一緒に転ぶ小正月　なかもと淑子
梦（ゆめ）の字の渦巻いてゐる三日かな　檜垣　梧樓
俎の乾ききったる七日かな　岡田　淑子
人声の消えて跫音二日かな　池田　博臣
正月の心理学的クリームソーダ　小林　実
人日や汽車を見にいく通過駅　佐藤　晏行
人日やもう悩みごと二つ三つ　横須賀洋子
初めての一般参賀背伸びする　イザベル真央
二日早や銀座の鴉ひしめきぬ　徳吉洋二郎
膝の猫犬遠吠のおでん酒　前島きんや
老スタイル私スタイル初鏡　高木　一惠
輪飾し勇んで駆けるルームランナー　金子　未完
太き指馴染ます直伝注連飾り　股野　久子
氷上の舞ためいきの海となる　吉野　精
明けの明星最大光度去年今年　白木　暢子

津田沼研究句会

日　時　毎月第二火曜日 午後六時より
投　句　二句事前投句
場　所　習志野市津田沼一丁目町会会館
問合せ先　横須賀洋子
（電話〇四七―四七二―三〇〇〇）

❑❑ 青葉研究句会報告 ❑❑

（於：千葉市民会館・第三会議室）

●第八十八回　平成三十年十一月二十二日

司会　長井　寛

実山椒抱擁あとの胸の疵　池田　博臣
はらからを憶う霜夜の実母散　長濵　聰子
女子学生専用マンションびわの花　鈴木まんぼう
真実の奥の真実冬銀河　石井紀美子
どの川もどこかへ消ゆる神の旅　越野　雄治
冬の窓を開け放てファシストがいる　松﨑あきら
背中から老いていきます日向ぼこ　細根　栞
水の面に広ごるしじま木の実落つ　長井　寛
ゆきあいの空夕鵙の声遠く　森井美惠子
この頃の記憶危ふし実南天　山﨑　幸子
魑魅が今銀座の角を毛皮着て　小林　実
婚約や落葉四五枚噛んでみる　並木　邑人
槇櫨の実カリンと音のして落ちる　加藤　法子

鰭長の解体実演腸を抜く　徳吉洋二郎
実くろぐろと平成最後だトベラの木も　たけなか華那
木の実をさがす　少年は　童女のために　吉野　精
朝寒の駐車場に剥出し小伽藍　棗　楕伊
実やら虚やら丸書いてちょんと蕪　細野　一敏
冬に入る弁当幕の楽屋裏　矢野　忠男

●第八十九回（平成三十年十二月二十七日）
司会　並木　邑人

かあさまの真っしろな嘘聖夜来る　長井　寛
短日の青天の霹靂夫消ゆ　山﨑　幸子
凍みわたる空まっ青なふりをする　たけなか華那
青い青い雪原　ちゃんと生きたか　松﨑あきら
風土記逸文荒巻の塩零れをり　越野　雄治
冬至風呂胸の刺青消せぬまま　徳吉洋二郎
風音の管弦楽的寒林　長濵　聰子
天に雲なし街に師走の欠片無し　矢野　忠男
年つまる青二才とは洒落臭い　細野　一敏
青空へ一瞬消ゆる雪輓馬　鈴木まんぼう
おでん酒二人はたまにだからよし　加藤　法子
数え日のプラネタリウム館の席　池田　博臣
時雨来るスコッチさらにはかどれり　吉野　精
ポインセチア青の世界へ誘えり　石井紀美子
六道の辻で降ろされ春を待つ　細根　栞
義士の日の電飾は青海波なり　並木　邑人
窮まりてユダが声出す雪曇り　小林　実
埋火のいか煮えており猫据る　森井美惠子
冬至の夜わが家の風呂は柚子五つ　棗　楕伊

●平成三十一年一月は日程、会場の都合で休会

青葉研究句会

日　時　毎月第四木曜日午後一時三十分より
投　句　三句事前投句
場　所　千葉市民会館
問合せ先　矢野　忠男
（電話〇四三―二二五一―四三八一）

❑❑ 柏研究句会報告 ❑❑

（於：柏市「ハックルベリー書店」2階）

●第七十八回（平成三十年十一月十日）
司会　岡田　春人

茶の花や引っ込み思案なるみよちゃん　髙橋　宗史
返り花雲の切れ間に透くうわさ　野口　京子
手に残る兜太の温み秋時雨　岡田　春人
胎動の大差小差の神無月　小林　俊子
鰯雲天の海流我を呑む　佐藤　鈴子
その時は直葬がよし冬鴉　椎名　鳳人
深海に巣くう鮟鱇神谷バー　長井　寛

●第七十九回（平成三十年十二月八日）
司会　髙橋　宗史

声なき叫びメタセコイアの深き森　佐藤　鈴子
変わりないことが何より年賀状　岡田　春人
雁渡る交しあふ声湖に降り　伊藤　希眸
北窓を塞ぎ推理の犯人を追う　小林　俊子
雪になる幽き声を聞く静寂　長井　寛
母に似る足の運びや紅葉狩　小張　直子
黄の落葉本の栞として生きる　髙橋　宗史
玉音放送に蒼ざめし父開戦日　井上けい子
大仏の螺髪の数や枇杷の花　野口　京子
恨み辛みなどあらざるや雪が降る　椎名　鳳人
ペンギンに生まれていたら霙酒　木之下みゆき

●第八十回（平成三十一年一月十二日）
司会　髙橋　宗史

家柄も人柄も良しお正月　岡田　春人
星冴ゆる風をあやしている土鈴　野口　京子
ひとり居の呼ばれたような霜の夜　下村　洋子
冬帽を目深に女性専用車　木之下みゆき
スマホで撮る手造りおせち最終章　佐藤　鈴子
「貴婦人」という寒菊に手を触れず　髙橋　宗史
平成の終は風花浄土かな　椎名　鳳人
一寸も違わぬホーム日脚伸ぶ　長井　寛

柏研究句会

日　時　毎月第二土曜日午後一時より
投　句　五句当日投句
場　所　柏市柏三丁目「ハックルベリー書店」
問合せ先　岡田　春人
（電話〇四―七一三九―八三三三）

新春ミニ吟行会

成田山初詣

日　時　平成三十一年一月二十三日(水)
会　場　成田市国際文化会館
参加者　三十八名
司　会　徳吉洋二郎
披　講　羽村美和子・星野一惠・髙橋健文

成田山新勝寺

大寒とは嘘のような穏やかな暖かさの中、JR成田駅に九時三十分、三十八名が集合した。①健脚組②一般組の二グループに分かれ出発。①組は事務局の方々の案内で門前町を抜け成田山へ向かった。

この町並みは約八百米の通りで、「日本遺産」に指定されており、情緒あふれる建物が並び、江戸時代の名残りを体験することが出来た。途中の三橋鷹女の撫で肩の像や、鰻の蒲焼きの匂いにも惑わされることなく成田山新勝寺に到着。当寺は真言宗智山派の大本山で、関東三山の筆頭であり、年間約一千万の人が訪れる。近世の貴重な寺院建築物として、光明堂、釈迦堂など五塔が「国の重要文化財」に指定されている。

参拝の後、裏山の成田山公園へ足を運ぶと山道の両側で綻び始めた白梅が出迎えてくれた。松尾芭蕉の句碑～高浜虚子の句碑～三橋鷹女の墓・句碑～鈴木三重吉の文学碑を巡りながら、ところどころのベンチで句作に励む一行。周りには臘梅、寒梅、寒椿、寒の鯉などが季語を提供してくれていた。

二時間の文学碑巡りを終え、十一時三十分句会場の成田市国際文化会館に到着した。

昼食、二句の投句を終え、十三時より句会が始まる。順調に進み最後に副会長三名の丁寧な講評、指導があり、十五時過ぎに終了。

有志十数名は成田駅前で反省会と称する飲み会へ流れた。

（文・写真　徳吉洋二郎）

【入賞者作品】（二句のうち一句）

①真言の大本堂を寒という　細根　栞
②胸中の火の鳥放つ空は春　島田　翠松
③撫で肩の鬼女といふべし紅梅花　越野　雄治
④寒梅に抱かれ鷹女の肩を抱く　並木　邑人
⑤あいまいは嫌いどん詰まりに冬椿　長濵　聰子
⑥賽銭を投げて音なき寒九かな　髙橋　健文
⑦寒椿かに足歩き鷹女の墓　村上　澄子
⑧春近しもぐらたたきのやうな庭　増田　豊子
⑨ひとりなら鷹女と同じ冬景色　渡辺　澄
⑩鬼女追って有為の奥山椿山　羽村美和子

【特別選者特選句】

（並木邑人副会長　特選）
会いたくて鷹女となれよ梅の花　大見　充子

（渡辺　澄副会長　特選）
賽銭を投げて音なき寒九かな　髙橋　健文

（檜垣梧樓副会長　特選）
あいまいは嫌いどん詰まりに冬椿　長濵　聰子

【その他作品】（二句のうち一句・受付順）

枯木山黙を持たされ浮御堂　矢野　忠男
人間を生きて鷹女の寒椿　山口　彩子
冬日燦鷹女の墓の石鏡　小林　実
丈六のあとかたも無し冬旱　檜垣　梧樓
参道のざわめき遠く梅一輪　星野　一惠
うしろ髪摑まれた新春のうの字　細野　一敏
還らざる時の重さや梅真白　山﨑　幸子
寒の水ひと口含み団十郎　徳吉洋二郎
こころ燃ゆ鷹女の像の冷たさに　石井紀美子
臘梅やすこし薄着で来てしまい　鈴木　瑩子
虚子の碑の奥のくらがり亀鳴けり　小川トシ子
会いたくて鷹女となれよ梅の花　大見　充子
あらたまの春待つ音よ水琴窟　森井美惠子
成田山寒梅さえも荒々し　久野　康子
たか女から言づてのありしだれ梅　なかもと淑子
枯菊や墓それぞれに湯飲茶碗　たけなか華那
柵の外に出ないで下さい福寿草　松﨑あきら
素心臘梅遠きものほの見えて　池田　博臣
天竺は歩いて行くべし絵双六　大澤ひろみ
鷹女墓尋ね探して小春空　山﨑　和久

花の内帯腰高に鷹女像　中村　博子
初髪に白髪も誇り鷹女像　川島　里子
女流隆盛坂道の紅梅　髙橋　宗史
参道のだらだら坂を寒日射し　末廣　陽惠
動かざる板碑の群れの寒さかな　平山　武彦
風光る明王の眼は千年紀　林　哲
紅葉の芽永代御膳五百圓　イザベル真央
大寒の肉叢若き仁王立つ　楠見　惠子

句会風景

副会長三名と上位入賞者 左より（敬称略）
檜垣副会長　細根栞　島田翠松
越野雄治　渡辺副会長　並木副会長

図書紹介

■句集『風の足あと』　水野　禮子
平成三十年十二月三十一日刊　白灯書房

葡萄一房山国の空分かつ
山眠る蛇笏龍太の風の中
極月の風の足あと山頭火

ひろば

■第四回千葉県俳句大賞

二月十一日、千葉市ホテルプラザ菜の花に於て贈賞式が開催され、当協会顧問の山崎聰氏が千葉県俳句大賞を受賞されました。おめでとうございます。

贈賞式に引き続き行われた新春交流俳句会については次号に掲載予定。

千葉県俳句大賞
山崎　聰　句集『流　沙』　本阿弥書店

童心のかすかなゆらぎ花筏
炎天の崩れる音として加齢
雪国を出てからおもう雪の山

千葉県俳句大賞　準賞
望月　晴美　句集『ひかりの器』　角川文化振興財団

福寿草天与の金のかがやきに
海といふひかりの器鳥渡る
水位満つごと年の夜の来たりけり

千葉県俳句大賞　奨励賞
渡邊啓二郎　句集『草上集』　本阿弥書店

ああ五月草上にして樹下にして
刈り残す草一叢は虫のもの
朽舟に足かけゆらす四月尽

《会員・会友の近況》

・昨年は六月、九月と二度も救急車のお世話になってしまいました。つくづく歳を感じた一年でした。今年は良い事が起きそうな気配を感じます。（細野　一敏）

・俳句歴四十年。進化か退化か模索中。無為自然に駄作を連発。芸術を愛し、自然に親しみ、旅を楽しむ。これもまた良し。（元橋　孝之）

・日頃の生活の中のちょっとした感動を五七五にと：思っているのですが、この所句帳の空白が続いています。（深山きんぎょ）

・読み、詠むことで俳句を味わいながら飲むビールが楽しみ。明日の仕事のエネルギーになります。ありがとう俳句。（前島きんや）

・師走に入ったとたん主人に病いが発覚。右往左往のうちに除夜の鐘を聞いてしまいました。俳句をやっている場合じゃないと思い乍らもどこかで繋がっていたい気持ちも正直なところ。まずは期限のない戦いに向き合ってまいります。（保坂　末子）

・昨年八月、前触れもなく腰がくだけて後ろに転倒、壁に尻の大きさぐらいの穴を開ける大怪我をしました。今年は自分の足で胸を張り堂々と人生を真っ直ぐに歩きたいと思っています。俳句は理想であり、夢の実現過程であるようです。（柳沢　純）

・昨年の秋久しぶりに参加した吟行会（久留里）、足取りがおぼつかないままですが、私には大きな励みとなりました。目標があればもう少し歩いていけそうに思う。俳句のある日々に感謝しています。（森　孝子）

・千葉市の加曽利貝塚が平成二十九年に六十二件目の特別史跡になりました。貝塚に貝を運んだ川として坂月川があります。その川の汚濁の浄化のために、二十年間続けて

来ましたが、そろそろ卒業したいと思っています。（山口　梅子）

・私のつたない句を目に留め、鑑賞して下さる皆様に感謝いたします。（三宅たくみ）

・早いか遅いかはあり誰でも一度は通る道ですが、元気に就寝した夫が急逝しました。まだ信じられずにあたふたとしております。（山﨑　幸子）

・昨年は、数年に一度の町内会の当番にあたり、些事に追われておりました。それでも俳句を楽しむことは出来、良い年でした。（松本　千花）

掲示板

《会員・会友異動》

●逝去（会員）堺　房男、倉田たへ子

●退会（会員）加納ひでこ、楠井　収、中澤澄子、橋本千惠子、安斎謙太郎、木下昌子、髙橋公子、西河しん平、斎田史子、大木雪浪、山本　新、安田時空

●俳名変更

（会員）無子（ないこ）（旧俳名愛甲知子）

《平成三十年度第四回幹事会》

日　時　平成三十年十一月二十七日（火）午後四時より

場　所　三井ガーデンホテル千葉

議　題

一、平成三十一年度度総会・俳句大会について

二、第一三一号会報について

三、秋の吟行会の報告

四、平成三十一年度ミニ吟行会について

五、平成三十一年度春の吟行会について

六、現代俳句協会（本部）の動向について

七、神奈川県俳句大会報告

八、創立四十周年実行委員会の発足について

九、各研究句会の状況について

十、その他　①会員・会友の入退会状況　②次回幹事会　③その他

終了後、現代俳句協会川辺幸一ジュニア部長を講師に招き研修会を実施。

《平成三十一年度第一回幹事会》

日　時　平成三十一年一月二十二日（火）午後六時より

場　所　船橋市勤労市民センター

議　題

一、平成三十一年度総会資料について

二、俳句大会の応募状況について

三、第一三二号会報について

四、ミニ吟行会について

五、平成三十一年度春の吟行会について

六、現代俳句協会（本部）の動向について

七、創立四十周年実行委員会について

八、各研究句会の状況

九、その他　①会員・会友の入退会状況　②次回幹事会　四月二日に臨時幹事会を予定　③その他

❑❑事務局・編集部だより❑❑

●既報の通り、三月十七日（日）は当会最大の行事、総会と俳句大会です。風邪など召されず出席されることを祈っております。また、恒例、春の吟行会は四月三十日。多くの方のご参加を願っております。

●「私の感銘句」近年にない九十名という多くの方から投稿頂き、有り難うございました。今号より一年間に亘り到着順に掲載させて頂きます。

●「諸家近詠」は名簿の順に一年半に一回のペースで投稿をお願いしております。作品発表の場として大いに活用下さい。

現代俳句千葉　第一三二号
平成三十一年三月一日発行

発行人　千葉県現代俳句協会　会長　秋尾　敏

現代俳句千葉編集部
〒261-0004　千葉市美浜区高洲三-十五-六-一六〇二
徳吉洋二郎

千葉県現代俳句協会事務局
〒278-0043　野田市清水五二七-一〇
髙橋　宗史
TEL・FAX　〇四-七一-二五-三三八二